



創立 60 周年記念

“ コンタクトレンズエピソード大賞 ”

● 最優秀賞作品

<学生の部> 「コンタクトレンズの素敵な思い出」

草塩 恵理 (女性/23才/東京都)

.....

私は小さい頃から父の仕事の関係で引っ越しをすることが多く、自分にとって地元と呼べる場所がない。小学校は3校通い、中学は2校、高校だけやっと1つの場所に3年間通えたものの、海外であったため地元とは程遠い存在だ。そして大学生である今も、また別の場所に住んでいる。あまりにも多くの場所に住んでいるので、自分の居場所を感じたり、「戻りたい」と思ったりすることはなかった。

コンタクトレンズを着けるようになったのは高校生からだった。小学校高学年からメガネをずっとかけており、高校に入ったと同時に母が気にかけてコンタクトを買ってくれた。小学校6年生の時から通っている眼科は当時住んでいた神奈川県にあり、そこでメガネやコンタクトを購入している。海外の高校に通っている間も一時帰国のたびにわざわざ買いに行き、大学に入っても家の近くの眼科ではなくそこまで足を伸ばしていた。

その眼科には、いつも優しく出迎えてくれる受付の人がいる。久々に会った時は「綺麗になったね」と声をかけてくれ、スーツを着ていた時は「就活？頑張ってるね。」と応援してくれた。視力を測ってくれる眼科医のおじさんは、最初は少しぶっきらぼうだったけれど、何度も通ううちに世間話をしてくれるようになった。コンタクトを購入するためにこの眼科に通うたび小学校の頃の記憶が蘇るのはもちろん、自分の成長や変化に気づいてくれる人たちがいるということも実感できた。

実際、今住んでいる家の近くの眼科でコンタクトを買うこともできた。値段や質で言ったらそこまで変わらないので、交通費をかけてまでそこに行く必要は正直あまりないのかもしれない。しかし、私にとってたった数年しか住まなかった場所でも、昔の私を知る人たちがいる場所に、数ヶ月に一度足を運ぶことは意味のあることなのだと思う。コンタクトを買うという小さな行動が、私にとって素敵な思い出を与えてくれた。



創立 60 周年記念

“ コンタクトレンズエピソード大賞 ”

● 最優秀賞作品

<一般の部> 「コンタクトレンズの苦しい思い出」

尾木直子 (女性/47才/滋賀県)

.....

朝はいつもギリギリだった。母にたたき起こされ、寝ぼけたままご飯をかきこむ。顔を洗ってコンタクトを入れ自転車にまたがって駅に向かう。いつものルーティン。あまり考えずにこなしていく朝の行動。

なのに、あの日は何かがおかしくて、玄関で立ち止まる。あれ？ 私コンタクト入れたっけ？ 入れたような気もするけど、自信ない。何より、見えへん。いれてへんかも。洗面所に戻ってケースを見ると、コンタクトは、ケースの中にしっかり鎮座している。

なんや。やっぱり、まだいれてへんかった。急いで入れる。右目。左目。だけど、見えない。どうも見にくい。おかしい。私の目、どうかしたかも。不審に思いコンタクトをはずす。目の中から出てきたのは、なんと、二枚のコンタクト！「ぎゃーっ」最初は割れたのかと思った。でも、二枚のコンタクトはどちらもちゃんと原型をとどめている。右目も、左目も。全部で四枚。

声を聞いて、母や妹が洗面所にかけてつける。

「どうしたん？」「目からコンタクトが二枚も出てきた！」「ええっ」あわてる私と母の横で、妹が空のコンタクトケースを見せながら冷静に言った。

「お姉ちゃん、間違えて私のも入れたんちゃう？」 そうだった。寝ぼけていた私は、まず妹のコンタクトをいれ、「なんかよく見えない」とその上に自分のコンタクトを入れたのだ。その後、どっちが自分のでどっちが妹のコンタクトなのかを見分けるのに時間がかかり、電車は間に合わず授業はもちろん遅刻となった。

私が大学生で妹が高校生。父も健在で母と家族四人で暮らしていたあの頃。家族みんな目が悪く、母、私、妹のコンタクトケースが洗面所に仲良く並んでいたっけ。月日は流れ、隣に並ぶコンタクトケースは夫のものになったけど、今でも時折思い出す。目から二枚のコンタクトがでてきた衝撃を。